

# 川下の風景⑪

## ～人生は川の流れるように～

米津 達也

【今、ここでしか書けない言葉もある】

“祖母が 99 歳で亡くなった。年末から調子を崩していた。その際、こんなことを書いた”

まるで石室への階段を下るように、地下 1 階へと進む。薄曇りの凍える寒さと風が遠ざかり、静寂の中に自身の足音だけが階段を踏みしめる。降りるたびにインクの臭いがきつくなり、それは纏うような懐かしいような臭いに満ちた地下の巨大空間だった。

京都新聞本社地下 1 階。かつて新聞の印刷場として活用されたこの空間で、「世界報道写真展」が開催された。その日、京都の祖母が危篤であると連絡を受け駆け付けたが、幸い病院に到着する頃には意識を戻し体調は安定していた。こんな機会でもなければ両親含め親戚がそろうこともない。立派な高齢者となった親世代の病気や薬の話題もそこそこに、朝刊で見た写真展を思い出し足を伸ばしたのだった。パレスチナガザ自治区。僅か 5 歳の女兒をイスラエルの爆撃で失い、白い布で包まれた亡骸をじっと抱きしめる女性の姿。表情は視えない。視えないことが逆に情景や心情を押し付ける。地下空間に染み込んだインクの臭いと同じだ。日本が平和で良かったなどとは思わない。世界各国で起こっているこれらの現実、明日わが身に起こってもおかしくない。平和で良かったね、と笑い合うことの方が現実味を欠いている。同時に私は祈らない。何かを祈って平和に暮らせるのなら、世界はもっと平和であるべきだ。祖母は 99 歳で年を越した。戦後、10 代の娘が新潟を離れ集団就職で京都にやって来た。生きる苦勞の面影が眼前の写真と京都の石室で重なった。

“年が明け、今年の 5 月で 100 歳になるだろうと思っていた矢先の出来事だった”

人間の脳は 250 万年の間に飛躍的に発達し、時間と空間と可能性の観念を獲得した（村上春樹『1Q84』より）

辛い思い出は比重をもって心の奥底に沈み、いくつもの別の時間を積み重ねることで蓋をしていく。しかし、それは必ず底にあって、ふとした折に顔を覗かせ我々の手を引いていく。幸福な思い出は気球が膨れ上がるように、出来事以上の思いを膨らませて我々を大空に導く。生きていくとは、我々の都合の良いように時間と空間をいびつに再構成し、自我と社会の狭間で生きる適応力として身に付く。

ストレス社会と言われる。人間が適切に保てるコミュニティ範囲は知れているのに、今や無限の世界にある。星屑のような情報の中にあっては、“私”の存在意義に疑義を持つ。常に“誰か”が主体にあり、“誰かと私”という比較の中で生きなければならない。私の中に巢食う他者性が、人の失態を必要以上に糾弾し貶め、“弱者”を憐れみ自分は違うと安心感に浸っている。

99 歳で祖母は逝去した。100 歳までとは思わない。突然だったとも言えない。ただ、雪の降る朝を迎えて、今日だったんだと思う。その表情や頭髮の温もりは 99 年の彼女の時間よりも、“私と彼女”の中で積

み重ねた思い出となって甦る。人間は脳のこの働きで身体の総エネルギーの 40%を消費する(『1Q84』)。舞う雪で冷えない頭と身体の火照りに気怠さを感じるのも、他者性に侵されない私のいびつな時間の追憶である。

#### 【祖父の遺した手帳】

33 年前に亡くなった祖父は字を書くことが好きだった。毎日、毎日、小さな手帳に日記を一言綴った。その一部を、と言っても 10 冊余りが出てきたが、それを祖母が 33 年大切に取っていた。祖母は、そんな生真面目な祖父を尊敬していた。

33 年の間、その手帳の存在は知らされなかった。祖母の葬儀に際し、棺に入れてやろうと準備されていた。葬儀の前、そっと開くと私の名前ばかりが出て来る。いつ、タツヤが訪ねてきて、どこに連れてやったか。いつ、何を、いくらで買ってやったか。ウチは裕福な家庭ではなかったが、祖父母に与えてもらったものは大きい。それらの手帳は全て祖母の棺に納められた。33 年振りに夫婦は再会を果たすだろう。

そして、そんな祖母も子どもたちに手紙を残した。大抵、遺言書は仏壇から出てくると相場が決まっている。葬儀の後、火葬が終わり、久々に自宅に戻った祖母の初七日を終えた時に、その遺言書の存在を知らされた。残った自宅を誰に継がせるか。これは 3 人の子どもたちの間で確認されていることだったが、わざわざそれを律義に遺言書として残し、誰にも言わずに仏壇の引き出しに仕舞っていた。世の中、高齢社会の進展で空前の「終活ブーム」であり、特に相続問題には事欠かない。それが正式な遺言書となるかどうかは知らない。ただ、祖母が介護が必要になるずっと以前にそう決めて、独りでそれを記して遺したことに十分な意義がある。

#### 【名僧】

祖母の葬儀は、祖母と長年付き合いのある住職が読経をあげてくれた。33 年前に祖父が亡くなり、その後、毎月の月命日で読経をあげて頂いていたようだ。当時は、住職の父親が担当し、その後、子へと代も変わったが、それでも長い付き合いだ。しかし、素人の私でも読経の上手い下手は分る。お世辞にもその読経は褒められたものではなく、その語り口のイマイチさが分かる。声と読経の上手さ。名僧の評価はここでも、と思うが祖母は毎月、月命日でこの住職と世間話を積み重ねてきた。その住職は冬になると手のあかぎれがひどくなる。夫婦共働きで、家事の役割分担がしっかりしているらしい。

「今日のおかずは何にしますんや？」その住職のあかぎれを見ていると、そんな祖母の京都弁が聴こえてくる。33 年余り。つまり、祖母にとってはこの住職こそが名僧であったわけだ。

祖父は岐阜の生まれ。祖母は新潟の田舎で生まれた。共に就職で京都にやって来た。染めの室町、織の西陣と言われた時代。室町界限は呉服問屋で賑わっていたが、問屋町はビジネスホテル街に様相を変えてしまった。室町から五条通をずっと西大谷へ。大谷派僧侶の墓が多い墓地一等地の一角に祖父が求めた墓がある。相当お金も掛かったようだが、二人はここに墓を求めた。その斡旋をしてくれたのが、先の住職の父である。私が知らないところで人の恩と縁が積み重なっている。

2025.2.20 米津達也